

## 研修会報告

平成 27 年 1 月 17 日

文責：病理部門長 戸村弘樹

### 研修会テーマ「病理検査の精度管理と作業環境対策」

開催日時 平成 27 年 1 月 17 日（土）13：00～17：00

会場 大崎市民病院 会議室 1.2.3

講演・講師

①「病理分野における精度管理について—メーカーからのご提案—」

ダコ・ジャパン株式会社

②「病理検査室におけるホルムアルデヒドの作業環境測定と対策事例」

株式会社 カルモア

③「ホルマリン使用の現状と作業環境対策について

—宮城県対がん協会と県内病理検査施設のアンケート結果から—

（公財）宮城県対がん協会 検査課病理係 佐藤由紀 技師

④「新病院の 2 次元バーコード管理による医療安全対策と作業環境対策」

大崎市民病院 臨床検査技術部 戸村弘樹 技師

生涯教育点数 専門 20 点

参加者 会員参加者 30 名 非会員 1 名 実務委員 5 名 計 36 名

### 内容

従来病理検査は手作業が多く、各施設に求められる業務も様々であるため、標準化が難しく、検査の精度管理の手法も各施設に任せられているのが実情であると思われる。しかし、毎年のように報道される病理関連の医療事故が生じている現状や種々の施設認定制度が広まる中、否応なしに我々はこれに取り組まなければいけなくなっている。また、ホルマリンや有機溶剤など劇物を取り扱う病理検査は、昨今の法改正もあり、作業者の健康管理、廃液の処理など作業環境対策に取り組む社会的義務もある。この研修会はこれら病理検査が抱える課題を会員と共に共有し、議論を重ね、少しでも解決へと向かうよう企画した。

講演①、②は病理分野における精度管理と作業環境対策について、メーカー側からの提案として、それぞれ対策事例を交えて講演して頂いた。多数の施設と対策を構築してきた事例は今後自施設の対応を考える時、非常に参考になるものであった。我々は今後、自施設の風習や習慣に囚われることなく、全国や世界基準も視野に入れた考え方をしなければいけないと思われた。

講演③は対がん協会の佐藤技師よりアンケート結果をもとにした宮城県のホルマリン対策の現状分析が報告され、次いで自施設の対策事例が発表された。全国的に第一管理区分を維持していくのは困難とされる中、宮城県では多数の施設が第一管理区分を維持しており、

その意識の高さが伺えたことは喜ばしいことであると思われる。しかし、この結果が実際の作業環境を正しく反映しているかについては疑問が残る。フロアから、現在用いられている作業環境測定方法は、高濃度のホルマリンを常時使用するような事業者向けの測定方法であり、高濃度ホルマリン下の作業と低濃度ホルマリン下の作業が複雑に組み合わされた病理検査には、実作業環境を反映していない可能性が指摘された。即ち、低濃度ホルマリン下での作業測定であれば、第一管理区分になるであろうし、また、低濃度ホルマリン下であっても長時間ホルマリンに暴露すれば、評価されない健康被害が起こる可能性もあるということであった。低濃度ホルマリン暴露に対する健康被害の評価には、バッジ式のホルマリン測定によって、個別の暴露測定のようなものも研究されているとのことであった。ホルマリンの健康被害については、鼻咽頭癌との関連が証明されており、高濃度ホルマリン作業者のほぼすべての人の中で鼻粘膜の異常が確認されるという報告には驚きを隠せなかった。自身も鼻粘膜の乾燥を常にかけているため、他人事とは思えなかった。自身や作業従事者を守るため、自施設の作業環境の実情を正しく把握し、必要であれば、施設管理者に改善を申し入れていくことも重要であると考えられた。

講演④は大崎市民病院の新病院開設に伴い構築された、2次元バーコード管理による医療安全対策と作業環境対策の講演であった。病理検査にはまだなじみの浅いバーコード運用であるが、この数年で急速に広まっていくと思われる。但し、その注意点として、現状の運用をそのままバーコード化するのではなく、医療事故が起こらない運用への見直しの一つの契機と考えてほしい。今後の各施設の対策に参考になれば幸いである。

今回、病理検査の精度管理と作業環境対策の研修会を企画したが、重要なことは、情報の共有と意識の統一であると考えられる。今後もこのような研修会において、議論していくことは重要であると考えられた。